

**夏秋作のトマトにおけるすすかび病の発生推移と防除**

夏秋作のトマトにおいて、すすかび病は、梅雨明け前後頃から発生し、気温の上昇とともに病勢が進展する。すすかび病の薬剤防除は、初発時から開始することで効果が高い。

農業研究センター生産環境研究所病害虫研究室 (担当者: 森山美穂・坂本幸栄子)

**研究のねらい**

トマトすすかび病は、近年、葉かび病抵抗性品種の普及に伴い、葉かび病の防除回数が減ることにより発生が増加している。一方で、葉かび病抵抗性品種に発生する新系統の葉かび病が増えているうえに、すすかび病の病斑は葉かび病と類似していることから、産地での本病の発生実態の把握が困難である。そこで、すすかび病の発生活消長を明らかにするとともに、本病に対する防除法を確立する。

**研究の成果**

1. 夏秋作におけるすすかび病は、梅雨明け後から発生し、気温の上昇とともに進展する。防除をしないと、収穫時の発病葉率は 100% 近くなり、発病度も 80 以上となる。なお、すすかび病は、葉かび病抵抗性遺伝子の有無に関係なく発生し、発生活消長にも差はない(図 1)。
2. すすかび病に対する薬剤防除は、初発から 10 日以上経過してから開始しても効果は低いが、初発時から開始すると効果は高い(図 2)。

**普及上の留意点**

1. 農薬の使用は、最新の登録内容を確認し、記載事項を厳守して行う。また、単独薬剤の連用は避け、異なる系統の薬剤を輪用する。

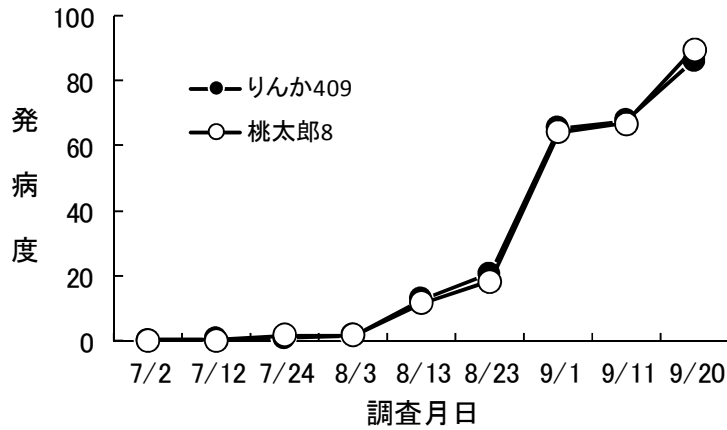


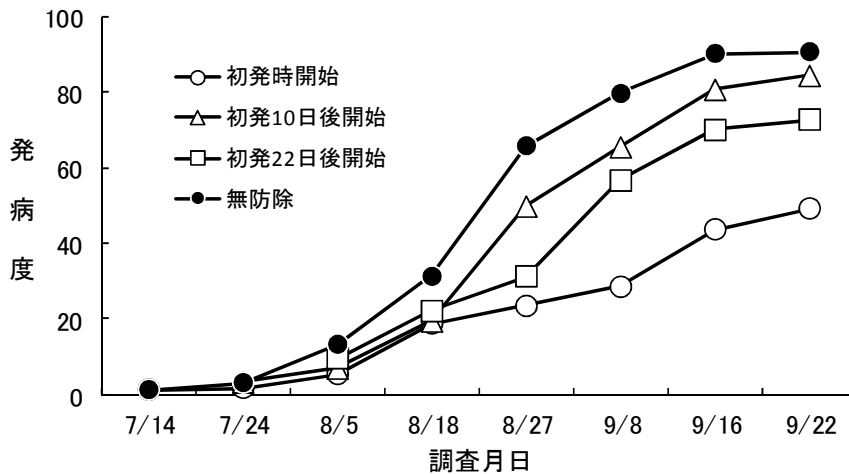
図1 夏秋作におけるすすかび病の発病推移

試験場所：熊本県農業研究センター生産環境研究所雨よけビニルハウス

定植：6月11日 すすかび病は自然発生。無防除

発病度 =  $\frac{\sum (\text{発病指数別葉数} \times \text{発病指数})}{(4 \times \text{調査葉数})} \times 100$

発病指数 0 (病斑面積が調査複葉の0%)、1 (同5%未満)、2 (同5%以上25%未満)、3 (同25%以上50%未満)、4 (同50%以上)



防除開始時期	7/14	7/24	8/5	8/18	8/27	9/8
初発時開始	I	P	T	J	I	P
初発 10 日後開始	—	I	P	T	J	I
初発 22 日後開始	—	—	I	P	T	J

I: イミノクタジンアルベシル酸塩水和剤, P: ペンチオピラド水和剤, T: TPN 水和剤, J: ジフェノコナゾール水和剤

図2 薬剤処理時期の違いによるすすかび病の防除効果

試験場所：熊本県農業研究センター生産環境研究所ビニルハウス

定植：平成 26 年 6 月 25 日 品種：アノモ TY-12 (葉かび病抵抗性遺伝子 Cf-9)

接種：6月30日に葉かび病菌新レースを接種し、7月14日に初発を確認した。すすかび病は自然発生。

7月24日までは葉かび病とすすかび病が混在していた。8月5日以降は、すすかび病のみ発生。